

「頑張り豆」

園長 鈴木 勝

子

五月の大型連休明けに、滋賀県大津市と千葉県市原市で散歩中の保育園児が巻き込まれる交通事故が大きく報道され、とても他人事とは思えず散歩の体制、園内外での安全について職員間で再確認、周知徹底いたしました。

子どもたちは入園、進級から2か月、新しい環境にも慣れ、日々新しい事を発見・挑戦の毎日です。自分で階段の上り下りに挑戦中の1歳児は保育者が階段の上と中間、下と子どもたちを囲むようにして見守る中、一生懸命に挑戦しています。保育者が見ているところでも階段を踏み外し、ケガをすることもあります。でも子どもは諦めません。昼にケガをしても夕方にはまた階段を上ろうとします。4・5歳児の間では鉄棒や雲梯がブームとなっているようです。連日代わるがわるたくさんの子が挑戦しています。先日4歳児のK君が「これ見て！」と両手のひらを広げて見せてくれました。K君の手のひらは3か所もまめが潰れて、皮がむけていました。「頑張り豆だね。痛いけど頑張った証拠だよ。」と言うと「痛くないよ。」とK君。いやいや皮までめくっていて痛くないはずがない。私たち大人は手のひらにまめができた瞬間に「痛い。これ以上できない」と諦めてしまうのではないのでしょうか。しかし子どもは違います。豆が出来、潰れた痛さ以上に「できるようになりたい！」「やってみたい！」という気持ちが強いのだと思います。K君の「痛くないよ」はそんな気持ちからなのです。隣にいたRちゃんも「私も頑張り豆ある」「ぼくも！」とH君も誇らしげに見せてくれました。そこにいた数名の子たちも必死に自分の手のひらを見つめ、豆を探していました。頑張り豆は子どもたちにとって文字通り頑張りの証。勲章のようですね。

4月に参加した研修会でNPO法人保育の安全研究・教育センターの掛札逸美氏のお話を聴く機会がありました。「保育の価値とリスク」は常に天秤上にあり、子どもはリスク、恐さを知らないからこそ何でも試せる。興味を持てる。「リスク・ゼロ」は人間の生活の中ではありえない。人間は「つい・うっかり・ぼんやり・めんどくさい」注意散漫になる脳を持った生き物だからこそ職員間の声の掛け合いが大切。というお話が印象的でした。また、人との関わりも「痛み」から覚える。とっくみあいのケンカも、友達関係のこじれも、身体の痛みも心の痛みも、**小さな痛み＝学び**であり、小さい頃にたくさん経験できるとよい。というお話でした。

散歩中の重大事故から、保育園での散歩に対して否定的な報道も耳にしました。散歩に限らず全ての保育活動にはリスクがつきものです。これまでとは、気象状況も子どもを取り巻く環境も変わってきています。大切な子どもさんの命と健康を守るため、「今まで大丈夫だったから大丈夫」ではなく、情報の収集や園内での情報共有、確認、声の掛け合い等これまで以上に徹底してまいります。また、大切な子どもさんをお預かりする上では、保護者の皆さまとの情報共有やコミュニケーションは不可欠となります。これまで以上に「保育の価値とリスク」を意識して保育・教育にあたりたいと強く考えます。ご理解とご協力の程、よろしく願いいたします。